

## 小林健太郎先生を悼む

長年にわたって評議員として本会の発展に貢献してこられた小林健太郎先生は、1997年7月17日、不帰の客となられた。享年59歳、あまりにも若すぎる逝去であった。



先生は、1938年6月1日福井市に生まれ、1961年に京都大学文学部（史学科地理学専攻）を卒業、同大学院修士課程を経て、1966年に博士課程を単位取得退学された。この間、1965年には同じ地理学を専攻しておられる博子夫人と結婚され、文字通りの二人三脚の道を歩み始められた。

1966年に京都大学教養部助手、1968年には滋賀大学教育学部講師。助教授を経て1977年には教授に昇進された。29年間に及ぶ滋賀大学での在職中には、教育学部長、学生部長、評議員、教育学部附属小学校長などの要職を歴任されたが、1997年4月に改組によって創設された大阪大学文学部人文地理学講座の主任教授として転任された。

学界にあっては、上記本会評議員のほか、日本地理学会、近畿都市学会の評議員、また人文地理学会と日本地理教育学会では評議員及び理事、さらにニュー野外歴史地理学研究会の会長を務められるなど、まさに八面六臂の活躍を継続中であった。

先生の研究は極めて重厚かつ精密なものであった。主たる専門とされた中世城館、戦国期城下町、近世初期城下町に関する多くの論文は、1985年に出版された『戦国城下町の研究』（大明堂、1986年、京都大学より文学博士）として見事に結実しているが、それは精密なフィールド調査と史料の分析に裏付けられた正に実証の果実である。また歴史地理学以外でも、先生は多くの論文を残された。膨大な近江の地域研究や、国土庁の土地分類図の地形分類を滋賀県全域にわたって担当された。海外からの「新しい地理学」は、先生が地理学を専攻されてからも数次にわたって上陸し、その度ごとに熱に浮かされたような「研究」が流行

し、そして数年を経て「古く」なっていく。先生の研究は、そのような泡のごときペーパーとは対蹠的なものであった。先生が京都大学教養部の助手に就任されたのは、たまたま私が2回生になった年でもあった。実習で地形図の模型作製を指導していただいたが、先生の地図に対する思い入れの深さに感動したことを今でも忘れ得ない。先生の地理学は、地図を読むことを全ての出発点とされた。比類なき筋金入りの地理学者であった。

先生は「コバケン」の愛称で、広く親しまれた。早くから髪の色が後退していた先生は、実際よりも年配に見られることが多かったが、学会の懇親会終了後も出身大学にこだわらず若い研究者と杯を酌み交わされることが多く、そのような折にでも腹藏なく学問上の議論をされた。笑顔と正義感と直言の「コバケン」から、極めて有益な示唆を与えられた人は枚挙に暇がないであろう。

かくいう私は、学生時代に指導していただいたことに加えて、滋賀大学で17年間、同僚として過ごさせていただいた。この17年間は、私にとって、あらゆる意味で貴重な年月となった。そして本当に楽しい17年間であった。先生との思い出は、限られた紙面に到底書き尽くせるものではない。1998年に滋賀大学教育学部地理学教室から発行された追悼文集に掲載されている一文をあわせてお読みいただきたい。また『地理』42-10にも、10年間同じく滋賀大学で同僚であった野間晴雄氏による先生の学問とお人柄についての暖かい文章が収録されている。

なお先生は、病床にあって近江に関する地域研究を本として上梓することを熱望しておられた。博子夫人の希望をうけて、先生の元同僚であった秋山元秀、野間晴雄、松田隆典の三氏と私が編集を担当した本が、京都のナカニシヤ出版から一周忌にあわせて公刊される予定である。

それにしても意欲に満ちて移られた大阪大学での期間は、わずか3カ月半であった。道半ばにして倒れられた先生は、無念なことであつたろう。涙しながらご冥福を祈る。 (高橋誠一)